

日本語学習者の文章構成における第 1 言語の影響

— 中国語母語話者の論説文を対象に —

石橋 玲子

1. はじめに

1.1 研究の意義

Cummins(1979)の共有基底言語能力モデルによると第 2 言語(以下 L2)の文章産出のような認知活動では、第 1 言語(以下 L1)の知識を共有しているという。しかし、L2 の文章産出で L1 の知識を使用した場合とそうでない場合での比較研究は多くはない(Kobayashi & Rinnert, 1994; 石橋, 1997a, 1997b, 1997c, 2002)。一方、文章構成というマクロ構造の視点からの比較研究は、様々な指標でなされてきたが、L2 学習者の文章構成は L1 の文章構成と相違している、または、類似していると結果がわかっており、一致した結果が得られていない。さらに、日本語学習者の書く L2 と L1 の文章の構成を比較した研究はほとんどない。本研究は、日本語学習者の L2 である日本語の文章における L1 の関与を研究している石橋の研究の継続で、マクロな文章構成の観点から、L1 の影響を明らかにするものである。

1.2 文章構成の定義

神尾(1989)では、文章構成は思考によって対象である文章を組み立てることで、文章構造を基礎付け維持する力学の論理で、必ずしも形態面の特徴を問う必要のない文章表現法の規範であるとしている。本研究においても、この定義により言語形態的な指標には言及しない。

1.3 先行研究

学習者の文章における L1 と L2 の文章構成の比較研究では、被験者間で分析した研究が多い。日本人の英語学習者を対象とした Kobayashi(1984)、Oi(1984)では、日本人の英語の文章構成は帰納パターンが多く、米国人の英語の文章構成は自分の意見をまず書き、その意見を支持する文を続ける演繹パターンが多いと報告している。

これに対し、Kubota(1998) は、日本人の英語学習者の書く英語の文章構成が L1 の影響かどうかは

同一被験者内で比較する必要があるとして、被験者内で L1 と L2 の文章を比較している。その結果、日本人の書く日本語の L1 の文章と L2 の英語の文章構成は類似しており、いずれも演繹であったと報告している。Hirose(2003)も 15 名の日本人英語学習者を対象に L1 と L2 の文章構成を比較し、ほとんどの被験者の L1 に演繹が多いこと、L2 では全員演繹であったが、作文の構成の得点では L1 と L2 の相関はなかったと報告している。これより Hirose(2003)は、L1、L2 における演繹パターンの作文教育の影響が示唆されるとしている。しかし、文章構成が L1 の影響を受けるのかどうかは、明らかにしていない。

2. 研究目的

本研究の目的は、日本語学習者を対象に、日本語のマクロな文章構成において、L1 の影響があるのかを L1 の文章、L1 を翻訳した L2 の文章、L2 で直接書いた文章で比較検討することである。さらに、同一対象者内の上記 3 種類の文章構成などの質の得点に相関があるのかを明らかにすることである。

3. 研究方法

3.1 対象者

予備教育の日本語学習者 16 名で、対象者の L1 は中国語である。日本語能力は上級レベルである。

3.2 手続き

対象者には作文の授業に論説文を書いてもらった。題目は「大家族と小家族」「男と女」「私の国の家と日本の家」「私の国の食生活と日本の食生活」から選択させた。第 1 回目の作文は、直接 L2 の日本語で、1 週間後の第 2 回目の作文は、第 1 回目と異なる題目で L1 の中国語で書いてもらい、その後その作文をもとに L2 の日本語で書いてもらった。いずれの際も辞書の使用は許可した。

3.3 分析

3.3.1 データ

分析に用いたデータは、同一対象者の第 2 回目の L1 の中国語の作文、L2 の日本語に翻訳した作文、第 1 回目の直接日本語で書いた L2 の作文(L1 での明示的な介在のない作文)、それぞれ 16 編、合計 48 編である。

3.3.2 分析方法

1) 文章構成パターン分析

Hirose(2003)¹に従って、①主題文の位置(冒頭、中間、結尾、潜在)②文章構成パターン(演繹、帰納、その他)、③まとめ文の有無(あり、なし、意見のみあり)の三つの指標を使用して分析した。

判定はそれぞれの文章の母語話者の日本語教師が実施した。

2) 作文の質的分析

石橋(2002: 49)の指標を採用した。すなわち内容、構成、言語形式の 3 要素の下位項目として、内容では具体的記述、アイディアの発展、全体的明確さ、興味、主題の 5 項目、構成は書き出し、論理的つながり、結論、まとまりの 4 項目、言語形式は語彙、言語形式の 2 項目でそれぞれの下位項目について 5 段階評価をした。各要素の内容、構成、言語形式の評価合計点は比較のためそれぞれ 100 点満点に換算した。評価者はそれぞれの母語話者で、日本語教師か日本語関係の研究分野の院生が実施した。

4. 結果と考察

4.1 文章構成パターン

4.1.1 主題文の位置

図 1 は主題文の位置を L1 作文、L2(翻訳)作文、L2(直接)作文別に表したものである。

図 1 からわかるように、L1、L2(翻訳)作文と L2(直接)では主題文の位置の占める割合が異なる。L1 と L2(翻訳)作文では主題文の位置の割合は同じであった。L1、L2(翻訳)では、63.5%が冒頭に主題文が位置していたが、L2(直接)では、37.5%であった。

反対に、結尾に主題文を書いた対象者は L2(直接)では、31.3%で約 3 割に上っていたが、L1 と L2(翻訳)では、L2(直接)作文の 6.3%にすぎなかった。

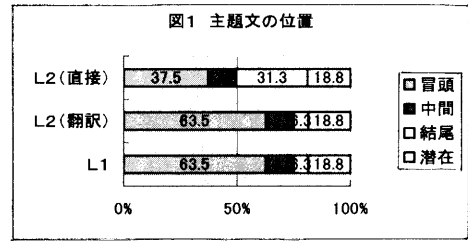


図 1 主題文の位置

Maynard(1996)は、日本の新聞コラムを分析して、日本語の文章構成は結尾重視の特徴を持つと報告している。Oi(1986)も日本人の学生の文章は最初に意見を表明しない特徴を持つと述べていることから、L2 の日本語の作文は日本人の作文の特徴をもつといえる。また、同一対象者内の L1 と L2(直接)の主題文の位置の一致度を対象者別に見たところ、一致度は 43.8%(16 名中 7 名)にすぎなかった。

これらのことから、L2(直接)の作文は主題文の位置に関しては、L1 の文章の影響のほかに、L2 の作文指導の影響などが示唆される。

4.1.2 文章構成パターン

図 2 は文章構成パターンを作文の種類別にみたものである。図 2 より L1、L2(翻訳)作文では、演繹が 68.8%を占めていた。一方、L2(直接)でも演繹が一番多かったものの 56.3%であり、その他のパターンの割合が 37.5%と L1 作文の全体に占める割合より多く、帰納については、L1、L2 作文共に 6.3%と少なかった。

同一対象者内の L1、L2(直接)の構成パターンの一致度を対象者別に見てみると 87.5%であった。このことより構成パターンでは L1 の類似が高いことがわかる。しかし、L2 でその他の演繹、帰納に入らない文章が多いことから、L1 でその他の構成パターンの対象者は L2 でもその他のパターンで書いていることがうかがえる。

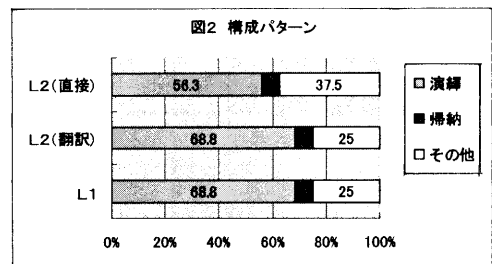


図 2 構成パターン

4.1.3. まとめ文の有無

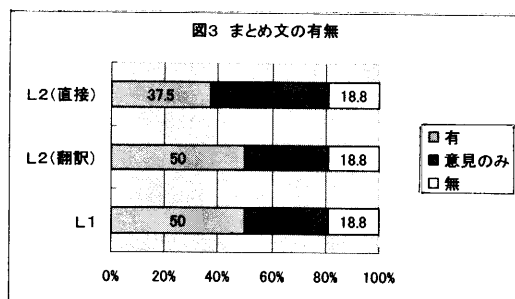


図3 まとめ文の有無

図3は、まとめ文の有無を作文の種類別にみたものである。図3からL1、L2(翻訳)では50%がまとめ文か再度意見を述べているが、L2(直接)では、37.5%にすぎず、意見のみを最後に述べているが43.5%と一番多かった。対象者内のL1、L2(直接)のまとめ文有無の一致度は75.0%であったが、L2の直接作文では、文章のまとめ文を提示せずに意見のみがL1やL2(翻訳)より多かった。Oi(1986)では、日本語の作文には書き手の意見が最後に来る特徴があると報告していることから、L2のまとめ文の有無は、L1作文の影響だけでなく、日本語の作文学習経験の影響も示唆される。

4.2 L1作文とL2作文の相関

次にL1作文とL2作文の質の得点から、相関をみる。

表1はL1、L2(翻訳)、L2(直接)作文の得点の相関

係数を示したものである。表1に示すように、L1、L2(翻訳)、L2(直接)作文内の内容、構成、言語形式については、相互にそれぞれ有意な相関を示している。特に、L2の日本語で書いた作文は、翻訳も直接日本語で書いた作文も内容、構成、言語形式間に1%の有意の相関が認められる。また、L2(翻訳)とL2(直接)の作文間には、L2(翻訳)の内容と、L2(直接)の内容、構成、言語形式に有意な相関が、また、言語形式でも、翻訳、直接間に有意な相関が認められる。

構成に関しては、3種類の作文を比較すると、L1の構成得点はL2(翻訳)、L2(直接)のいずれの構成得点とも有意な相関を示していない。また、L2(翻訳)とL2(直接)間にも構成において有意な相関はなかった。

これらのことから、文章構成において、L1作文とその翻訳作文のL2(翻訳)間には構成パターンは酷似していたが、質の得点に有意な相関が認められず、L2(翻訳)作文の構成得点はL2の言語発達が影響していると考えられる。

L2(直接)、L2(翻訳)の作文間においては、内容、言語形式に有意な相関があったことから、L2の作文は翻訳、直接を問わず、第1言語の作文の影響より、第2言語の内容や言語形式に関連する言語能力の影響が示唆される。

表1 L1作文、L2(翻訳)作文、L2(直接)作文間の質得点の相関係数

		L1			L2(翻訳)			L2(直接)		
		内容	構成	言語形式	内容	構成	言語形式	内容	構成	言語形式
L1	内容	1.00								
	構成	.68**	1.00							
	言語形式	.81**	.54*	1.00						
L2 (翻訳)	内容	.41	.33	.37	1.00					
	構成	.36	.27	.43	.95**	1.00				
	言語形式	.39	.26	.50	.87**	.85**	1.00			
L2 (直接)	内容	.32	.01	.10	.53*	.44	.47	1.00		
	構成	.28	.10	.18	.50*	.48	.60*	.90**	1.00	
	言語形式	.32	-.08	.22	.68**	.61*	.71**	.84**	.77**	1.00

*p<.05 **p<.01

これらの結果は、Hirose(2003)の日本人英語学習者で行った研究結果、すなわち構成の得点は L1 と L2 では相関がなかったとする結果と一致する。本研究の中国人日本語学習者においても、L1 の構成得点と L2 の構成得点には相関は認められなかった。データ数が少ないことでは、Hirose と同じであるが、構成の得点に相関はなかったという共通結果から、L2 の作文の構成は L2 の発達度、及び L2 での作文教育の結果の影響等が日本語学習者の作文においても示唆される。

5. まとめ

本研究では、中国語を L1 とする日本語学習者 16 名を対象に、同一対象者の L1 の作文、L1 の翻訳作文、L2 の作文をマクロな文章構成の面から比較、L1 の影響を検討した。さらに作文の質の得点間の相関により、L1 の影響を考察した。マクロな文章構成では、主題文の位置、文章構成パターン、まとめ文の有無の 3 指標で分析、作文の質は石橋(2002)に従って、内容、構成、言語形式の 3 要素の 11 下位項目について 5 段階評価し、得点を分析した。その結果、次のことがわかった。

- 1) L1 の作文と L2 の作文の構成パターンは類似していたが、主題文の位置には相違があった。
- 2) L1 と L2 作文には構成の質に相関がなかった。
- 3) L2(翻訳)作文は、L1 との構成は一致していたが、構成の質に相関はなかった。

以上の結果から、L2 の作文の文章構成は、L1 からの影響が強というより、L2 の言語発達度や、L2 の作文教育経験等が影響していることが示唆された。

6. 今後の課題

今後の課題は L2 の文章構成が L2 の習熟度や、作文教育経験の関連を明らかにすることである。また、データ数を増やして本研究結果を検証するとともに、中国語以外の言語を L1 とする日本語学習者の文章構成についても L1 との関連を検討することである。

本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金「基

盤研究(C)：課題番号 18520396、研究代表者(石橋玲子)の援助を受けています。

注

- 1) ②の文章構成パターンの分類は Hirose(2003)と若干異なる。

参考文献

- 石橋玲子(1997a)。「第 1 言語が第 2 言語の作文に及ぼす効果－質の観点から」『日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念』凡人社、107－119。
- 石橋玲子(1997b)。「第 1 言語が第 2 言語の作文に及ぼす効果－文の流暢性と複雑性の観点から」『言語文化と日本語教育』13 号、67－77。
- 石橋玲子(1997c)。「第 1 言語が第 2 言語の作文に及ぼす影響－全体的誤用の観点から」『日本語教育』95 号、日本語教育学会、1－12。
- 石橋玲子(2002)。「第 2 言語習得における第 1 言語の関与－日本語学習者の作文産出から」風間書房
- 神尾暢子(1990)。「文章の種類」『講座日本語と日本語教育』5 明治書院。
- Cummins J.(1979).Cognitive/academic language proficiency, linguistic interdependence, the optimum age question and some other matters. *Working Papers on Bilingual-ism*,19,197-205.
- Kobayashi, H.(1984).*Rhetorical patterns in English and Japanese* .Unpublished doctoral dissertation, Columbia University Teachers College, New York.
- Kobayashi, H & Rinnert, C(1994).Effects of First Language on Second Language Writing: Translation versus Direct Composition. In A. Cumming (Ed.), *Bilingual Performance in Reading and Writing* .Language Learning ,John Benjamin Publishing Company.
- Hirose, K.(2003).Comparing L1 and L2 organizational patterns in the argumentative writing of Japanese EFL students. *Journal of Second Language Writing*,12,181-209.
- Kubota, R.(1998).An investigation of L1-L2 transfer in writing among Japanese university students: Implications for contrastive rhetoric. *Journal of Second Language Writing*, 7,69-100.
- Maynard, S.(1996).Presentation of one's view in Japanese newspaper columns: Commentary strategies and sequencing.*Text*,16,391-421.
- Oi, K.(1986).Cross-cultural differences in rhetorical pattern-ing: A study of Japanese and English. *JACET Bulletin*,17,23-48.

いしばし れいこ／茨城大学留学生センター
isibasi@mx.ibaraki.ac.jp